

「どんな街に住みたいか」と聞かれたら、私たちはどう答えるでしょうか。かつて堺屋太一氏は、「歩いて楽しい街がよい。それは、社会資本の最も重要なものだ」と語っておられます。自動車依存型の社会から、徒歩＋公共交通を活用した社会へのシフトという潮流があり、その背景には、資源やエネルギーの危機という地球規模の環境問題があります。和歌山市の「まちなか再生計画」でも、「都市機能の強化・集積を図り、人・活動・機能が集積したコンパクトシティをめざす」としています。

昨年5月、和歌山市と南海電気鉄道㈱は、市街地活性化事業で、現在の和歌山市駅ビル（1973年開業）を建て替え、新ビル内に、現在、老朽化し耐震改修工事が必要な市民図書館を移転、さらに、今後5ヵ年で駅前広場を再整備すると発表しました。公共交通の利便性向上・交通結節機能を強化し、和歌山の玄関口にふさわしい景観を創出し、衰退イメージが漂う昨今の駅周辺を刷新、駅の拠点性の向上をめざすものです。記者会見で、和歌山市の尾花市長は、「和歌山市駅が、にぎわいの中心になるようなまちづくりをしていきたい」と語り、和歌山県の仁坂知事は、「周辺地域の再開発への起爆剤になることを期待する」とコメントを寄せました。

コンパクトな街とは、一定の質と密度を伴った、秩序ある安定性を備えた街であり、「中心性・求心性」が必要です。既存の地域資源を如何に活用し、リニューアルするかという視点で、道路や公園、公共施設等ハードの社会資本だけでなく、伝統的な商業、暮らし、地域の文化や自然環境を見直し、それらの相互補完により、街の文化やにぎわい、風景を演出し、個性的で緻密な街として再構築する必要があります。

米国の作家、T・ピンデルは、著書“A Good Place to Live”（1995）の中で、世界各地を旅した経験から、経済活動が活発に行われていることを前提とした上で、街のよさ、魅力を構成する要素として、次の6つを挙げています。

①人々が歓声をあげたり、打ち解け合う場がある。②自動車等に頼らず、徒歩で買物や用事ができる。③文化・環境面でのアメニティ。④ユニークなもの、どこにもない固有の何かをもつ。⑤快適さ・気候のよさ。⑥意外性のあること。——これらを総合したイメージは、「自然環境に恵まれ、にぎわいや癒しの場があり、インフラや文化施設がほぼ整ったコンパクトな街で、目玉となる自慢や魅力があり、さらに、何かサプライズも期待できる…」。

最も難しいのは、⑥の「意外性」で、この存在の如何が、街づくりのスパイス的な役割を担い、注目や関心呼び、増幅させます。

「人々が集う場、にぎわいや憩いの場」を考える際、「第3の場所」（米国の社会学者、R・オルデンバーグが1989年に提唱した概念。因みに、後年、スターバックスはこれを社是とし、彼に自社の推薦を依頼したが、断られたというエピソードも）という言葉が想起します。すなわち、「第1の場所」は家族がコミュニケーションする場所、「第2の場所」は仕事や勉強の仲間がコミュニケーションする職場や学校であり、これらが家族や仲間内という閉じられた場であるのに対し、「第3の場所」は、不特定多数の人同士が出会い、集う、誰に対しても開かれた場で、特に都市生活者にとって、社会の中での自分の存在を確かめ、連帯感を持ったり、精神のバランスを保つ上でも重要です。

古くは、江戸時代の日本の浮世風呂や浮世床——町民が自由に出入りし、くつろげる社交場がありました。17世紀のフランスのサロンは、ジャンルを超えた自由な思考や出会いの場であり、共に楽しみ、相互に交流する集まりでした。サロンの本質は、「会話」であり、会話を通じて、人を楽しませ、自分も楽しむことが最大の目的で、そこから新しい文化や流行、価値が生まれ、ある種のマーケットが発生します。

上記のオルデンバーグは、最近のインタビューで、「今日、最も重要な“第3の場所”はどこか？」と聞かれ、「図書館、公共施設、ホール、教会、カフェ…」等を挙げています。また、「SNS等のソーシャルメディアは、新たな“第3の場所”となりえるか？」の質問には、「“第3の場所”とは、対面式であることが条件であり、電子コミュニケーションが、バーチャルな“第3の場所”となるという考えは誤解を招く。顔の見えない知らない隣人を、あなたは不審に感じませんか」と答えています。

公共施設やホールに加え、ストリートや商店街、地域の小公園等、住民だけでなく、来訪者や旅行者にもオープンな場の様相が、その街の魅力を決定付けるかもしれません。

年齢も性別も職業も、やって来た目的もそれぞれ異なる多様な人々がコミュニケーションできる、あるいは、用事がなくても何となく足が向く、心惹かれる空気が街中に漂っている…。そのようなさりげない場の再生と集積を、地域やコミュニティの形成に繋げていくことが、街のにぎわいとビジネス機会の拡大をもたらすのではないのでしょうか。

（谷 奈々）